

言語の分析を通してみる社会的構築としての自己
—— 実験的アプローチによる検証 ——

木村竜也^{*1}・西田晃一^{*2*3}・與久田 巖^{*1}

Self as Social Construction Revealed by Verbal Reports:
An Experimental Study

Tatsuya KIMURA, Koichi NISHIDA and Iwao YOKUDA

Abstract

The purpose of this study is to reveal new aspects of "self." We consider "self" as dynamic and socially constructive. From this viewpoint, the representation of self is based on an understanding what kind of situation we are in. To examine this hypothesis, an experiment was conducted, in which informants were asked to explain their self - what kind of person they want to be understood as - in two different situations by writing essays. These essays addressed the following three points: 1) when informants pay attention the asymmetric relations in their situation, they tend to present appealing aspects of self, 2) when informants regard symmetric relations as important in their situation, they tend to present affiliative aspects of self, and 3) when informants are interested in increased friendship with particular persons, they tend to disclose negative aspects of self.

*1 関西大学大学院社会学研究科博士課程後期課程在学中

*2 関西大学総合情報学部

*3 本研究は、平成9年度関西大学学術助成基金「奨励研究」の助成を受けた。

現実の社会生活を営む上において我々は、時と場に応じて、様々な「…らしさ」を演じている。時に「先生らしく」、時に「学生らしく」、時に「子どもらしく」。その一方で我々は、「本当の自分は…」とか「自分らしく…」などという表現を用いて、自己の本質に言及しようとする。

心理学の世界では、我々が日常「わたし」と呼ぶ実存を、「自己 (self)」と呼んでいる。この自己は、個人の中であって静的で、比較的安定した傾向を有する実体と見なすのが、伝統的な考え方である。パーソナリティを尺度を使って測定しようとするのも、アイデンティティを語るのも、等しく共通してそこに静的で安定した、換言すれば「変わらない自己」を想定しているのである。そこには、本人すら気づいていない「真の自己」が存在し、そして心理学こそがその「真の自己の姿」を明らかにしようとするのだという主張が隠蔽されている。

一方、木村・西田 (1996) は、こうした考え方に疑問を呈する。

彼らは、自己を社会的な文脈によってその時々で構成される概念であると考えた。そしてこれを状況依存的自己 (situational self) と呼んだ。"situational" という単語に比べて日本語の「状況依存」では、自己が状況に従属しているかのような印象を与えてしまう。その意味では必ずしも望ましい表現とはいえないが、少なくとも従来の自己概念との区別は明確になる。

彼らが示したデータは、我々が自己の本質に言及しようとするほど結局は他者 (この場合の他者は必ずしも具体的な人物である必要はなく、例えば自己を内省的に捉えているもう一人の自己であっても構わない) との関係性に言及せざるを得ないことを物語っている。すなわち自己は、他者との関わりという層面で、その相互交渉のプロセスを通して構築される動的なものではないだろうか。

本研究では、自己の一貫性を否定しようというのではない。日常において我々は、「自分らしさ」というものを実感している。それは、様々な状況の違いにもかかわらず一貫している側面を持っているという感覚であろう。従来の自己研究が扱ってきたのは、主にこのような自己の側面である。一方、自己には、前述のように状況によって変化する側面もある。ここで、焦点を当てているのはこういった自己の側面なのである。

1. 社会的構築主義の視点

状況の影響を重視する立場のひとつに社会的構築主義 (social constructionism) がある。従来の心理学における諸理論も、何らかの形で状況が心的現象に及ぼす影響を考慮していないわけではない。しかし、社会的構築主義のそれはより積極的である。Burr(1995)は、社会的構築主義の基本的な前提のひとつとして、我々が日常を理解する仕方が歴史のおよび文化的に固有であり、このことが我々の行動を決定していると述べている。

社会的構築主義の代表的な考えをみると、Gergenは知識の社会的過程への依存について述べている。またHarréは自己と経験との関係を言語の機能に焦点を当てて述べており、Billigは態度が議論の展開にいかに関与するかを述べている。以下に、彼らの考えを取り上げ、心的現象と状況との密接な関係を見ていくことにする。

1.1. 知識の社会的構築

Gergen (1965, 1997) は、個人の置かれた状況が行動に及ぼす影響に関する実験を行っている。被験者が話す内容に対して実験者が肯定的評価を与えた場合と、中性的あるいは否定的な評価を与えた場合とでは、前者の方が被験者の自己評価が高くなった。つまり、他者の評価という状況が被験者の自己評価に影響を及ぼしたのである。このことから、Gergenは状況の影響を重視するに至った。個人の行動に影響を及ぼす状況として、Gergen (1973, 1984) は歴史を特に重視している。彼は、社会心理学などの社会科学が、自然科学的な方法をとってきている点を不適當だとしている。なぜなら、自然科学が対象としている現象は不変的であるのに対し、社会科学のそれは変化を基本的性質としているからである。その変化とは時間的な推移によってもたらされるものである。この対象の性質を考慮すると、社会心理学がとるべき方法は、その研究対象である心的事象の変化をもたらししている歴史とその影響を重視したものとなる。

こうした歴史の影響は、ある理論が集団に共有され認められる過程にもあると Gergen(1994)は指摘している。理論が生成されその妥当性を判断する際、自然科学ではその理論のもととなっている現象が再度観察されるかどうかが規準となる。これは、対象の性質が不変だからである。しかし社会科学の場合、その対象は変化を基本的性質としているため、自然科学と同じようにはいかない。社会科学における理論の妥当性の規準は、その理論における用語の使用が当該のコミュニティ（文化・社会的集団、研究者集団）の常識的な使い方から見て認められるか否かによって判断される。つまり、理論の中で説明されている内容が、同一集団の他のメンバーに認められるかどうか規準となる。その用語の使用の範囲は、当該のコミュニティにおける言語的な慣習の規準によって限定される。その規準から見て範囲を超えた用語の使用は他者と共有されないために無意味なものになってしまうし、認められるレベルのものであれば、その理論は共有され妥当だと見なされるのである。この過程には、社会的な関係が大きく関わっており、社会的な状況の影響を受けると言えよう。

上述のGergenの指摘は、社会科学と自然科学の方法論に関するものであるが、理論以外の知識についても適用できよう。たとえば一般常識について考えてみよう。ある個人の信じている知識が、時間的推移の中で当該のコミュニティの他のメンバーに受け入れられていった場合、この知識は常識と呼べるものになる。常識が生じる過程においても他のメンバーとの社会的関係が大きな役割を果たしている。このように心的な現象のひとつである知識が、あるコミュニティに共有される過程には、状況が大きな影響を及ぼしているのである。

1.2. 自己の社会的構築

Harré(1993)は、自己について、それが従来 of 心理学において述べられてきたような比較的安定した実体や属性ではなく、空間的なある地点に位置づけられるもの(location)と見ている。ここで言う空間とは社会的な状況を指す。こう見ることで、自己をその時々 of 状況によって変化するものとして捉えようとしているのである。個人が行う自己に関する認識とは、この位置

づけられているという感覚から生じるものである。

Harréにとっての自己とは、自分に関する経験が体系化されたものである(Potter & Wetherell, 1987; Burr, 1995)。経験は、言語によって記述されてはじめて意味を持つ。言い換えれば、言語には経験を作り出す機能がある。個人の生活内には様々な自分に関する事象があろう。それらの事象のうち、言語によって意味づけられたものだけが自分に関する経験となる。そして、それらの経験が積み重なって体系化されたものが、その個人が言い得る自己なのである(Harré, 1987, 1989)。いわば言語が自己を形作っていると言えよう。当然、言語は文化の影響を強く受けるものである。したがって、自己に関する経験の体系化は、個人が生育してきた文化の影響を受けることになる。

例えばSmith(1981)は、ニュージーランドの先住民であるマオリ族に関する研究を行っている。マオリ族の場合、個人の経験は自らが獲得したものではなく、すべてマナ (mana) という超自然的な力によって与えられたものと捉えられている。マナは個人が生まれた時点で神によって先天的に与えられたものであり、いわば運命的なものである。たとえばある個人が成功した場合、それはその個人の能力や努力によるのではなく、その個人に与えられたマナのためだと見なされる。

西洋文化の場合、経験は個人が獲得したものであり、成功が個人の能力や努力によるものとされる。この点でマオリ文化と西洋文化は対照的である。経験と自己との関連で見ると、西洋文化では、経験は個人が状況に対して働きかけた結果得られるものであり、経験の中核に自己が存在する。これに対し、マオリ族の自己は経験の中核にはない。西洋的の自己が能動的であるのに対し、マオリ的の自己は受動的なのである。

Smithの研究は、文化的状況の違いが個人の自己の在り方に影響を及ぼしている具体例を示していると言えよう。

1.3. 態度の社会的構築

伝統的な態度理論における態度の概念は、ある対象に対して比較的一貫して安定した個人内の傾向とされている。確かに行動の背後に態度を想定することで、個人の行動を理解しやすくなるだろう。しかしBillig(1989, 1991, 1997)は、直接観察することのできない概念を行動の背後に想定するよりも、直接観察可能なものに焦点をおくべきだとして態度研究に異議を唱えている。そしてBillig(1989, 1991)は態度理論における「態度」との混同をさけるために、「見解 (views)」という用語を用いて、見解 (態度) の変動性について論じている。

まずBilligは、世間に広く普及している常識には、矛盾するテーマが含まれることを指摘し、人々がこれらを知識の一部として持っており、常識の使用は文脈によって決まることを述べている (Billig, 1987, 1989, 1991)。

例えばBillig(1989, 1991)は、イギリス社会において広く知れ渡っているイギリス王室の話題を取り上げている。イギリス王室について家族で議論してもらい、議論の中に現れてくる個人

の見解を分析している。そこで明らかになったことは、一人の個人の見解が、議論の文脈によって変化することであった。すなわち見解（態度）が文脈によって構築されているのである。

またBillig(1985)は、矛盾するテーマを含む例として偏見の問題も取り上げている。

我々は、基本的に自分のまわりにある様々な事象を、カテゴリーに分ける傾向を持っている。従来の偏見研究は、このようなカテゴリー化を用いて、偏見がかかった見解に焦点を当てている。それについてBillig(1985)は、偏見がかかっていない見解が研究対象から抜け落ちているとして、従来の偏見研究を批判している。そして議論に注目し、そこに現れてくる個人の見解の内容を吟味することで、偏見がかかった見解と偏見がかかっていない見解を区別できることを論じている。また、そう区別することによって従来の偏見研究では扱われてこなかった偏見がかかっていない見解を扱うことができるとしている。

このようにBilligは議論に注目することで、そこに現れてくる個人の見解を理解することができると同時に、その見解が文脈によって、すなわち社会的に構築されると論じている。

以上見てきたように、Gergenは知識が集団に共有される過程に社会的な関係が影響を及ぼすことを示し、Harréは言語の役割を重視して文化的な状況が経験と自己の構築にかかわっているとしている。また、Smithの研究では文化的状況の違いにより自己の在り方までもが違ってくることが示されている。Billigは、従来の態度研究に欠けていた変動性への視点を見解という概念を導入して考察し、それが議論の経過に影響されることを明らかにしている。彼らはそれぞれ、知識、自己と経験、態度（見解）と違う心的現象を取り上げているが、そこに共通してあるのは状況の重要性である。

2. 研究の目的

本研究では、自己が様々な状況においてどのように表明されるのかに焦点を当てる。すなわち、自己が状況によってどのように構築されているのかに注目する。ある状況における自己表明は、その状況を個人がどのように捉えているのかという意味づけの結果としてなされるものである。我々は日常の様々な場面において、その場に応じて自らを表明する。その表明は、その場面をどのようなものとして捉えるかの結果としてなされているのではないだろうか。

このことを確かめるため、本研究では実験的な方法を選択した。実験では、いくつかの場面を呈示し、実験協力者にその場面をどのようなものかを尋ね、そこでどのように自分を表明するかを自由記述によって回答させた。

3. 方法

3.1. 実験協力者

有償のボランティアとして実験に参加協力した四年制大学の学部学生29名が、今回の実験協力者であった（男子16名、女子13名、平均年齢21.7歳、 $SD=1.76$ ）。協力者には番号を付し、基

礎的な情報として年齢と性別を一覧表にまとめてTable 1 に示した。

Table 1 協力者番号、年齢、及び性別一覧表

#	年齢	性別	#	年齢	性別	#	年齢	性別
1	20	男	14	21	女	24	22	女
2	21	女	15	21	女	26	22	男
3	21	男	16	21	男	27	21	男
6	20	男	17	29	女	28	21	男
7	21	女	18	23	男	29	21	女
8	20	女	19	21	女	30	23	男
10	21	男	20	25	男	31	21	男
11	21	男	21	21	男	32	22	女
12	22	男	22	22	女	34	20	女
13	22	男	23	22	女			

※ 欠番は実験の途中で参加しなくなった協力者である。

3.2. 実験の概要

この実験は、2つの異なる場面において、協力者が自分をどのような人物として、その場に居合わせるであろう相手に理解してもらいたいかを文章で回答するものであった。

実験は、大枠では2要因の被験者内要因実験と見なすことができる。協力者は2つの異なる場面に回答した。その際2つの場面が相互に与える影響を緩和するために、場面1と場面2の間に3週間の間隔をおいた。また協力者は1つの場面につき2回の回答をした。その際、1回目の回答から1週間後に2回目の回答をした。したがって実験全体を通して協力者は、都合4回の回答をしたことになる。

3.3. 実験の手続き

各場面における1回目の回答では、提示された4つの具体例のうちから協力者が回答しやすいものを1つ選び、その具体例において自分のことをどのような人物として相手に理解してもらいたいかを回答した。2つの場面と具体例、及びその際の教示についてはTable 2にまとめた。

各場面における2回目の回答は、協力者が書いた1回目の回答を呈示し、より詳しい説明を求めた。具体的な質問は以下の3点に絞って行った。1)抽象的な回答に対して具体的な回答を求めた。例えば、「私は、仕事の話ばかりじゃなくて、お互いの人間性を出せるような会話がいい。」(#8、20歳、女性)、「自分の思っていることをほぼそのまま口に出す。」(#12、22歳、男性)などの回答に対して下線を付し、「内容を具体的に教えて下さい」と質問を行った。2)

Table 2 各場面の具体例と教示

2つの場面と具体例	
場面1	場面2
a. 就職試験の重役面接	a. 合コン
b. ゼミ選考審査での面接	b. 参加し始めた頃のサークルで…
c. 入試の面接	c. ゼミの最初のコンパ
d. アルバイト採用時の面接	d. アルバイト先で同僚に紹介されたとき
1回目の回答における教示	
次の1から4の場面で、あなたは自分のことを、どのような人物として相手に理解してもらいたいですか？ そのときに、あなたはどのように <u>振る舞い</u> 、 <u>何を話し</u> 、 <u>どんな表情をし</u> 、 <u>どんな服装</u> でいて、また <u>どんな態度をとる</u> でしょうか？ あなたが一番答えやすい場面を一つ選び答えて下さい。	
2回目の回答における教示例（1回目の回答の該当する部分に下線を引いて示して）	
1) 具体的にはどのような話をしますか？	
2) その理由を詳しく教えてください。	
3) その場面はあなたにとってどのような意味を持っていますか？	
※下線部は、教示の順序効果に配慮して場面1と場面2では異なる順序で提示した。	

実験者の理解を助けるために、より具体的な説明を求めた。例えば、「面接をしている人に何か話を振られたら、採用に不利にならない限り、正直に思ったことを言う。」(#22、22歳、女性)に対しては、「不利にならないこととは具体的にどのようなことですか」と質問を行った。また「…始まったら、おそらく何も考えず、演技をしていない自分を見せます。…また、無理な背伸びはせずに、あるがままの自分の姿を見せられるような、話をしています。」(#18、23歳、男性)に対しては、「演技していない自分とは具体的にあなたのどのような部分ですか？」と質問を行った。3)全ての協力者に状況への意味づけを求めた。具体的には「あなたの選択した場面は、あなたにとってどのような意味を持っていますか？」と質問を行った。

実験は、協力者にある程度の緊張感を持ってもらうために、また回答に集中してもらうために集団状況で一斉に実施した。回答は電子メールを用いて自由記述式で求めた。謝礼は最後の実験終了後に手渡した。なお調査用紙はA4判に印刷し、表紙をつけて配布した。所要時間は教示も含めて40～55分程度であった。

4. 結果および考察

まず始めに、自己表明がなされていると思われる箇所、および選択した場面に対して意味づけを行っていると思われる部分を、協力者ごとに抜き出した。この抽出は、我々3名の合意のもとに進められた。なお、手続きの項でも述べたように、2回目の回答において我々は、場面に対する意味づけを質問している。この質問に対する回答も、意味づけ反応に含めた。ただし、

この質問に対する回答のすべてが、必ずしも意味づけの表明とはなっていなかった。

回答の抽出に当たって、明らかな漢字の間違い、漢字変換のミスやミスタイピングに起因すると思われる誤字などは訂正を行った。

本文中「 」内はすべて、協力者の回答である。また、回答の意味を理解する上で補足が必要と思われる箇所については、[] を付して示した。なお () は、協力者自身が用いた括弧記号である。

まずはじめに、自己表明と場面への意味づけが明瞭な3名の協力者の回答を分析する。

そこで明らかとなった知見を敷衍するために、さらに9名の回答について分析を行う。

本研究では、以上の12名を対象として分析を行う。それは、これら12名の回答が、残りの協力

Table 3-1 #14 (21歳 女性) の場面1 に対する意味づけと自己表明

ゼミ選考審査での面接
場面に対する意味づけ
面接という、かきこまったシチュエーションで自分をいかにうまく出すかというのが最大のポイントだから、終始笑顔だけは絶やさないように心掛けます。
【面接では】先生と自分を同列ではなく、上下の関係だということを明確に頭において接するということが大事だということです。
一般的に面接というと、初対面の人に対して、自分をいかに良く見せるかということがポイントとなると思うので、[中略]、それはゼミ選考審査での面接にも通じるところがあると思うので、[ゼミ選考審査での面接は]長まらなければならない場面、と思っています。
自己表明
研究内容について入念な事前勉強をしていき、その自分が勉強した内容、そしてこれから研究したい内容を語ります。そのときはなるべく笑顔で、フレンドリーに、しかし尊敬の念は忘れない、ちゃんと先生を敬う態度をとります。
面接の時にすごく堅い格好をしていっても、あとで苦しくなると思うので、いつも通りでいいと思います。
【面接では】とりあえず、先生に自分の熱意を伝えるのが一番なので、自分の自然な姿勢は崩さず、しかしかなり（自分なりに）低姿勢で笑顔を保って研究内容について相談する、という形でいいんじゃないかとおもいました。
特に、成績でゼミ生を選ぶ先生と面談するときは、成績は悪いけれどやる気だけはとてもあることをしつこく何度も強調し、事前の勉強をとにかく力を入れて行い、それについてほかの人よりもこんなに勉強する気があるのよー！！ということアピールします。先生に、とても熱心な研究心がある生徒だと感じてもらうためです。
そこ[成績の話題]に触れるととても弱いので、自分の勝負できるところで喋りまくって相手に印象づけるのが大事だと思います。あと、とりあえずがさつなところがばれないように、多少お行儀よく振る舞います。
終始笑顔だけは絶やさないように心掛けます。
決して甘えた態度はとらず、しかし先生を尊敬しているということも絶対にわすれません。
ゼミの先生には、あとでほろが出ると困るので、自分をよく見せようとかいうことよりも、自分をなるべく知ってもらうということが第一だと思います。

者の回答に比べて率直に自己を表明していたからである。もちろん、分析の対象から外した協力者の回答が自己表明を行っていないと言うわけではない。しかしながら、その表現レベルが極めて間接的であったりして、我々の間でもその解釈に一致が見いだされなかった。したがって今回の分析対象から除外することとした。

Table 3-1は、#14の回答である。

彼女は、場面1の事例としてゼミ選考の面接場面を選んだ。

彼女にとってここは、「上下の関係だということを明確に頭に置いて接する」「かしこまったシチュエーション」であり「長まらなければならない」場面なのである。しかもそこで彼女は、「なるべく笑顔で、フレンドリーに、しかし尊敬の念は忘れない、ちゃんと先生を敬う態度」で、なおかつ「低姿勢で笑顔を保って」「先生を尊敬していることを絶対に忘れない」ようにしなければならない。彼女の理解では、この場における最も重要な関係性は、相手との上下関係であり、自分自身は下に位置するということなのである。ここで物事を決定する（この場合、彼女のゼミを決める）のは、下位にいる彼女ではなく、上位にいる先生なのである。ただ彼女にできるのは、「先生に、とても熱心な研究心がある生徒だと感じてもらい」、「自分をよく見せようとかいうことよりも、自分をなるべく知ってもらう」努力をすることなのである。「いかに自分をうまく出すかが最大のポイント」となるのである。

このような場であると意味づけたからこそ「先生を敬う態度」を通して彼女は、そのことを相手に示そうとしているのだろう。常識的に、先生と生徒は上下の関係にある。その意味で彼女は、このような表明することで、社会的な常識を兼ね備えているという自己を表明しているとも取れる。こうした自己表明は、「笑顔」でいることを繰り返し強調するところにも現れている。また他にも、「終始笑顔」でいることは、彼女のソーシャルスキルの高さを示すことになるし、それは温厚、誠実などの側面を強調することになるかもしれない。

さらに、「研究内容について入念な事前勉強」をし、「それについてほかの人よりもこんなに勉強する気があるのよー！！」というように「熱心な研究心」を前面に押し出すことで、この場において一番強調しなければならないと彼女が感じている「自分の研究したい内容」を伝えるとともに、それと平行して彼女は、真面目な自己、(ゼミでの勉強という面での)熱心な自己を表現していると考えられる。

そうした自己として自己を表現することで、自分にとって有利な決定が上位者である先生によってなされると彼女は判断したのであろう。

その一方で彼女は、「面接の時にすごく堅い格好をしていっても、あとで苦しくなると思うので」普段通りの服装で面接に臨み、「がさつなところがばれないように、多少お行儀良く」して「甘えた態度はとらず」、「そこ [成績の話題] に触れられるととても弱いので、自分の勝負できるところで喋りまくって」、この場面では彼女が望ましくないと判断した自己の側面を抑制しようと努めている。

次に、場面2の事例として彼女は、参加し始めた頃のサークルを選んだ。ここでの彼女の回

答は、彼女自身の体験談を語ったものと推察される。(Table 3-2参照)

彼女はサークルを、大学生活の中心に据えていたと考えられる。「大学生活＝サークル活動

Table 3-2 #14 (21歳 女性) の場面 2 に対する意味づけと自己表明

参加し始めた頃のサークルで…
<p>場面に対する意味づけ</p> <p>大学に入ったばかりの頃、大学生活＝サークル活動とっていたので、初めてサークルに顔を出したとき、ここでしくじったらこれからの4年間がばあになると気合いを入れていた覚えがあります。</p> <p>自分のなかに理想の自分がいて、それに近づけるように大学デビューをしようとしていました。</p> <p>[サークル活動とは] 大学生活を左右するであろう人脈を広げる場である。</p>
<p>自己表明</p> <p>とても気を配って誰とでも会話をするように心掛けました。</p> <p>自分にマイナスイメージがつくような言動すべてを回避していました。</p> <p>とりあえず話しやすいいい子と思われるように努力したと思います。</p> <p>自分が話すときは話しまくり、聞くときは熱心に聞くよう心掛けました。大学生活を先に送ってきた先輩にそのことを聞きたい気持ちはたくさんあったし、しかし自分のことを満足に語れないような人間には思われなくなかったので自分のことも適度に話しました。</p> <p>とりあえず嫌われないための最低ラインを守りつつ自分を見せていくしかないと思っていました。今も昔もそうですが、私は八方美人で愛想が良すぎるころがあるので、[逆に]それを武器にしようと考えていたと思います。</p> <p>人の話を聞くことができ、かつ自分のことを話すこともできる。ものの考え方がフレキシブルであり筋も通っている。とりあえず一本スジが通った人間になりたかったので、そのように振る舞おうとしていたと思います。</p>

とっていた」というのであるから、そこは彼女にとって主体性を発揮する、大学生としての自己実現の場として認識されていたのであろう。だからこそ、そこに参加し始めた頃は「ここでしくじったらこれからの4年間がばあになる」「大学生活を左右する」場だったのである。まさしく彼女がいうように、「大学デビュー」の場だったのである。

サークルである以上そこには、先輩－後輩という上下の関係と、同輩という並行の関係が混在している。しかしこの場合の上下関係は、いわば幅(平均的には4歳前後の年齢差)をもった仲間関係に包含されうる。それを仮に、仲間性と呼んでみる。彼女が目じたのは、この仲間性であり、そのメンバーの一員として参加することではなかっただろうか。「デビュー」という表現が象徴しているように、彼女にとってここでの重要な関係性は、このような仲間性に見られる並行的な関係性ではないだろうか。そのような関係性を構築する比較的初期の段階であるからこそ、「とても気を配って誰とでも会話するように心掛け」「八方美人で愛想が良すぎるところがあるので、[逆に]それを武器にし」て、当該集団の中に彼女自身を溶け込ませるよう努めたのであろう。

そこで彼女は、「話しやすいいい子と思われるように努力」する。既存の集団に、対等な仲間として参加するにあたって、彼女は自らの協調性を示そうとしたのだろう。「自分にマイナスイメージがつくような言動すべてを回避し」「嫌われないための最低ラインを守りつつ自分を見せ」るのも、結果的には協調的な自己を示すことにつながるのではないだろうか。

加えて彼女は、理想の自己像（「人の話を聞くことができ、かつ自分のことを話すこともできる」）を表明しようとする。「ものの考え方がフレキシブルであり筋も通っている。とりあえず一本スジが通った人間になりたかったので、そのように振る舞おうとしていた」のであり、具体的には「自分が話すときは話しまくり、聞くときは熱心に聞くよう心掛けました。大学生活を先に送ってきた先輩にそのことを聞きたい気持ちはたくさんあったし、しかし自分のことを満足に語れないような人間には思われなくなかったので自分のことも適度に話し」たのである。こうした形で彼女は、他者に配慮しつつも自分を失わない、彼女が理想とする自律した自己を表明しようとしたのではないだろうか。

場面2への質問（場面3）として彼女には、サークルでのその後について尋ねた。（Table 3-3参照）

Table 3-3 #14 (21歳 女性) の場面3 に対する意味づけと自己表明

サークル活動をずっと続けていきたいと感じるようになった頃
場面に対する意味づけ
より深く人間的なおつきあいが出来る人を見つける [場]。
自己表明
話の内容はもっとくだけていったと思います。[中略] 仲良くなろうと思ったら人間的なつながりというか、もっと人間らしいところを見せていく方がいいと思うからです。そして話の内容が変わって時間がたち、仲良くなれたかなと思えば、もっと自分を知ってもらい、より深く人間的なおつきあいが出来る人を見つけるために、最低限のマナーを守りつつ自分の好きなように振る舞い、とりたいたい態度をとり、好きな服装をします。
[私は] 根がどうやらかまらしいので、そのように振る舞ってしまいます。

この段階では、彼女はここを「より深く人間的なおつきあいが出来る人を見つける」場と捉えている。先に指摘した、仲間性に象徴される並行的な関係は、あの段階ではまだ、均質な関係性にしか過ぎない。それに対してここで彼女が重視するのは、全体的に均質な仲間性ではなく、一人一人のメンバーとの個別の関係である。

それは、「最低限のマナーを守りつつ」という表現にあるように、彼女が他のメンバーと共にこの集団を形成しているのだという厳然たる事実と自覚の上に成り立っている。集団固有の規範を遵守しつつ、さらに個別の深い関係性に着目していると考えられる。仲間性の濃淡に着目していると表現すればよいだろうか？ この集団内の他者から既に一定の評価を獲得しているという意味では、もはや他者からの評価は問題にならないということであろう。

したがって彼女はここで、「人間的なつながりというか、もっと人間らしいところを見せて」ゆこうと考える。それは具体的には「自分の好きなように振る舞い、とりたいたい態度をとり、好

きな服装をする」ことであり、「根がどうやらかがままらしいので、そのように振る舞」うことなのである。これらは、彼女の独善性や自己中心性の表明である。こうした否定的な側面ももつ存在として自己を表明した方が、より「人間らしい」存在として映ると彼女は考えているのであろう。

Table 4-1は、#22の回答である。

彼女は、場面1の事例としてアルバイトの面接を取り上げた。

Table 4-1 #22 (22歳 女性) の場面1 に対する意味づけと自己表明

アルバイト採用時の面接	
場面に対する意味づけ	たかがアルバイトと言っても、それで落とされると自分が否定されたようで結構ショックを受けるので、私はそれほど気楽なものとは思っていない。[中略] 多少なりとも自分の能力や性格を問われる大切な場であるし、どちらかと言えばフォーマルなもの。
自己表明	そのアルバイトに対してやる気を持っている。明るくて普通の女の子だが、自分の考えをきちんと持っていて、まわりにあまり流されないしっかりした人。責任感があるので仕事を任せられると思わせる。 初対面の人と接する時は、第一印象が大切なので、面接場所に着いた時点から人当たりの良さそうな態度で接する。面接をしている人の話を聞くときは、下を向いたりしないでその人の方を見て相槌をうって、ちゃんと話を聞いていて仕事に対してのやる気を見せる。必要があれば、今までのバイトの経験なども相手に話し、もし聞かれればそのバイトを志望した動機なども答えられるようにはしておく。 面接をしている人に何か話を振られたら、面接に不利にならない限り、正直に思ったことを言う。自分に都合の悪いことでも、バイトでそこまで深くかかわりあうことは滅多にないので、まあ何を話しても構わないと思う。私は全く知らない人と話すとき、その人に悪い印象をもってもらいたくないので、けっこうこにこしたり、いい人そうな態度を取ろうとするので、バイトの面接の時でも同様だろう。

彼女はここで、「たかがアルバイトと言っても、それで落とされると自分が否定されたようで結構ショックを受ける」「多少なりとも自分の能力や性格を問われる大切な場であるし、どちらかと言えばフォーマルな場」と考えている。これは、#14の「かしこまったシチュエーション」と共通する。

そして、「採用に不利にならない限り、正直に思ったことを言」い、「自分に都合の悪いこと[プライベートに関わるような質問]でも、バイトでそこまで深くかかわりあうことは滅多にないので、まあ何を話しても構わない」と考える。「採用に不利にならない限り」という表現が示唆するとおり、彼女の理解もまた#14と同様、この場を上下関係の場と解しているのではないだろうか？ 採用に関する決定権は、面接する側に握られているのであって、彼女はいわば弱者の立場にある。だからこそ、採用に不利になるような発言は避け、答えたくない（あるいは答える必要のない）プライベートな質問にも応じようとする。

そこで彼女は、「そのアルバイトに対してやる気を持ってい」て、「今までのバイトの経験なども相手に話し、もし聞かれればそのバイトを志望した動機なども答えられるようにはしてお

く」ことで、仕事に関する側面での自己の真面目さ、熱心さを表明する。

また、「自分の考えをきちんと持っていて、まわりあまり流されないしっかりした人」であることを示し、「仕事を任せられると思わせる」ことで、責任感のある自己を表明する。

加えて、「第一印象が大切なので、面接場所に着いた時点から人当たりの良さそうな態度で接」し、「面接をしている人の話を聞くときは、下をむいたりしないでその人の方を見て相手をうって、ちゃんと話を聞いて」「けっこうここにこしたり、いい人そうな態度」を示すことで、高いソーシャルスキルをもった自己であることを表明している。

次に彼女は、ゼミの最初のコンパを場面2の事例として選んだ。(Table 4-2参照)

Table 4-2 #22 (22歳 女性)の場面2に対する意味づけと自己表明

ゼミの最初のコンパ	
場面に対する意味づけ	
他のゼミのメンバーや先生と交流することで、ゼミ内で新しい友だちを作るのに有効な場面。	
ゼミの中に知り合いがないのであれば、それをきっかけに仲良くなれるチャンスになるだろうし、[中略] お互いのことをよく知るいい機会になる。	
自己表明	
頭のいい人と思われなくていいが、バカとは思われたくない。うるさい人でもなく、それなりに物事を考えている人と思われたい。私は初対面の人や、大勢での飲み会はあまり得意ではないが、これから少なくとも週1回ゼミの時間に顔をつきあわせていく人たちとの飲み会なので、とりあえず嫌な人とか、つまらない人と思われたくないの、その場が和めるように話題に参加する。初めての飲み会なので、ゼミ内にはまだ仲良くない人も大勢いるはずなので、いろいろな人と言葉を交わす努力をする。それと先入観でこの人は苦手なタイプかも、、、と感じて喋る気になれないことも多々あるが、ゼミで極力それはしない。	
初めて話す人とは話が詰まりやすいので、1対1ではあまり喋りたくない。周囲の人4、5人ぐらいで喋る。	
あまり貝にならず、とりあえず何か喋ってみる。	
私は表情がないとよく言われるので、コンパの場で無表情でいないように気をつける。	

彼女はここを、「ゼミ内で新しい友達を作るのに有効な場面」であり「お互いのことをよく知るいい機会」だと考えている。その一方で、「初対面の人や、大勢での飲み会はあまり得意ではないが、[中略]嫌な人とか、つまらない人と思われたくないの、その場が和めるように話題に参加する」と述べている。積極的に参加したいわけではないが、しかしその必要性は感じているのであろう。彼女が感じるその必要性とは、ゼミ内での人間関係、特にゼミ生同士の繋がりを重視するからである。「いろいろな人と言葉を交わす努力」をし、「先入観でこの人は苦手なタイプかも、、、と感じて喋る気になれないことも多々あるが、ゼミでは極力それはしない」ように努めるのは、そうした気持ちの表れであろう。これは、#14において仲間性と表現した関係性を重視していることの結果ではないだろうか。またその際、「周囲の人4、5人ぐらいで喋る」と述べているところから、彼女がこの場で指向しているのが、特定個人との関係を結ぶことではなく、ゼミという集団の中にとけ込むことを目指していることがわかる。

そこで彼女は、「あまり貝にならず、とりあえず何か喋り、「コンパの場で無表情でないよう気をつけ」ながら「その場が和めるように話題に参加する」のである。こうして彼女は、この場における彼女の協調性を表明することになる。

その際彼女は、コンパに参加しているゼミのメンバーからは、「頭のいい人と思われなくていいが、バカとは思われたくない。うるさい人でもなく、それなりに物事を考えている人と思われたい」と言う。勉強する場としてのゼミで、良くも悪くも突出せず、ゼミの中間層、多数派として位置する自己を表明しているものと思われる。さらに、「嫌な人とか、つまらない人と思われたくない」というように、人間的な側面でも中庸を指向する自己であることを表明していると考えられる。

場面2への質問(場面3)として、ゼミに慣れた頃のコンパについて尋ねた。(Table4-3参照)

Table 4-3 #22 (22歳 女性) の場面3 に対する意味づけと自己表明

ゼミに慣れた頃のコンパ	
場面に対する意味づけ	ある程度仲がいい人たちとだったら、気兼ねがいらぬ【場】。
自己表明	私は友だちの中でも、どちらかという人話を聞くことの方が多い。が、飲みにいったりするとしゃべる側になるので、ゼミのコンパでも他の人と仲良くなっていたら、どうでもいいことを話題に沢山しゃべっているだろう。 感じがいいように振る舞おうとか、相手によく思われようということはあまりないのでいつもと変わらない態度で接する。

彼女はここを、「気兼ねのいらぬ」場ととらえている。ゼミ活動において一定の期間が経過し、メンバーとして一定の評価を得た後であるからこそ、気兼ねなく過ごせるし、「感じがいいように振る舞おうとか、相手によく思われようということはあまりない」のであろう。この点では、より深い関係を指向した#14と、同じ基盤の上に立っていると言えるだろう。

ここでの彼女は、「友だちの中でも、どちらかという人話を聞くことの方が多い。が、飲みにいったりするとしゃべる側になる」ので、「どうでもいいことを沢山しゃべっているだろう」という。宴席で様子が変わるとするのは、多かれ少なかれ誰にでもある。ただ、それを素直に出せるかどうかは、その時々によって異なるだろう。ゼミの他のメンバーから受ける評価を意識する必要がない段階だからこそ彼女は、このような自己の二面性を表明できるのだろう。

Table 5-1は、#28の回答である。

彼は、場面1の事例として就職試験の重役面接を取り上げた。

彼はこの場を、「あと一歩で[就職するという]目標が達成されるという大事な場面」で、「クリーニングしたと言わんばかりのピチットしたスーツを着て面接に挑む」という。#14が「かしまったシチュエーション」といい、#22が「どちらかと言えばフォーマル」といったように、この協力者もまた、場面1を公的な場と捉えているようである。

Table 5-1 #28 (21歳 男性) の場面1 に対する意味づけと自己表明

就職試験の重役面接	
場面に対する意味づけ	重役面接に至るまで、幾つかのテストをクリアしてきて、あと一步で目標が達成されるという大事な場面だと思うので、人生（社会人編）の中でのスタート場所の決定という感じがする。
自己表明	人柄がよく、誠実そうな人だと思ってもらい、こいつは会社に入ってもらいたいと思わせるように理解してもらいたい。 重役面接の時、自分は卑屈にならないように堂々とした態度をとり、相手が不愉快にならない位にちょっと大きめの態度で振る舞い、【中略】なるべくなら自分の答えずらそうな質問をされないように、こちらから多くのことをしゃべっていきたい。表情は相手に覇気がないと思われたいので、どちらかというと明るめで、相手の目を見るようにし、そしてクリーニングしたと言わんばかりのピチットしたスーツを着て面接に挑むであろう。 面接には採用されたいから行くのだから、ちょっとでも他の人より勝っているように思われたい。 適当に答えているとすどいツッコミを入れられそうだから、そうなるくらいなら素直に答えたい。 質問をされて答えられないと相手に悪い印象しか与えないような気がするので、それならこっちから聞いていった方がいい。

そこで彼は、「面接には採用されに行くのだから、ちょっとでも他の人より勝っているように思われたい」という。そのために、「適当に答えているとすどいツッコミを入れられそうだから、そうなるくらいなら素直に答え」るし「質問をされて答えられないと相手に悪い印象しか与えられないような気がするので」「なるべくなら自分の答えずらそうな質問をされないように、こちらから多くのことをしゃべって」ゆこうとする。彼もまたこの場において上下の関係性を重視しているのであろう。

そのなかで下位に位置する彼は、「卑屈にならないように堂々とした態度」で「相手が不愉快にならない位にちょっと大きめの態度」をとろうとする。そして「覇気がないと思われたいので、どちらかというと明るめで、相手の目を見るようにし」て面接を受けるのだという。こうした姿勢は、彼の積極的な自己や、若々しい自己、闊達な自己、あるいは彼の芯の強さなどを表明することになるだろう。彼は、こうした側面を中心に自らの自己を表明することが、この場面でもっともふさわしい（彼の言葉を借りれば「こいつは会社に入ってもらいたいと思わせるように理解してもらいたい」）と考えたのであろう。

場面2では彼は、参加し始めた頃のサークルを取り上げている。(Table 5-2参照)

彼は、「友だちを増やしたくて」サークルに入った。そうすることが「大学生活の充実を得る」ためには必要であり、「サークルに入っているのと、いないのとでは環境がかなり変わってくる」そうだ。参加し始めた頃のサークルは、「生活をより楽しくするためのスタート地点」

Table 5-2 #28 (21歳 男性) の場面2 に対する意味づけと自己表明

参加し始めた頃のサークルで…	
場面に対する意味づけ	友だちを増やしたくてサークルに入った。 学生生活の充実を得るために [サークルに] に入った。 生活をより楽しくするためのスタート地点という意味を持っていると思う。 サークルに入っているのと、サークルに入っていないのとでは環境がかなりかわってくると思うのでけっこう大事な場面だと思う。
自己表明	自分を明るく気さくな感じで、友だちになりやすそうな人と思ってもらいたい。 暗い人と思われぬようにしときたい。例えば、ずっと下をみないようにしたりいろんな人と目を合わすようにして喋るきっかけを作ったりする。 振る舞いは、普段通りでいいと思うが、あくまで控え目な感じがいいと思う。先輩もたくさんいると思うので、できるだけ失礼のないようにしておきたい。態度は、なるべくでかい態度は控えた方がいいと思う。

なのである。彼が重視しているのはそこで得られる人間関係、具体的には友達関係である。これは、#14や#22の分析において、仲間性として捉えた関係性と共通しているだろう。

こうした場面では、彼は「あくまで控え目な感じがいい」と考え「なるべくでかい態度は控えようとする。「先輩もたくさんいると思うので、できるだけ失礼のないようにしておきたい」そうだ。目立ちすぎず、むしろ地味な自己であろうとしている。場面1において、やや尊大な自己を表明しようとしていたことと比べると、この違いは非常に興味深いものである。

また、「暗い人と思われぬように」するために「ずっと下を見ないようにしたりいろんな人と目を合わすようにして喋るきっかけをつく」ろうとする。そうすることで、協調的で、「明るく気さくな感じ」の自己を表明しようとする。「友だちになりやすそうな人」であろうと努めるのである。

場面2の質問として行われた場面3では、ある程度なれた頃のサークルでの様子を尋ねた。(Table5-3参照)

この段階を彼は、「少しだれてきている」と表現する。「慣れてきた人たちに表情を作っても変に思われるだけ」だし、「何を話すかは、[中略] そんなに困らない気がする」という。「沈黙が起きてても全然気にならな」い「すぐく居心地のいい空間」であるともいう。#22が「気兼ねのいない場」という表現を使ったのとよく似ている。サークルのメンバーとして、一定の評価を得たと自他共に認識しているからこそ、他者の視点が気にならない、あるいは不快にはならないのだろう。このような認識を背景に、より個別の深い関係性が焦点となっていることが、「その人とはどんな話が合うかだいたいわかってきている」し、「このひとなら [横柄な態度をとっても] これぐらい冗談で済むよな、とかがわかってくる」という表現からうかがえる。

Table 5-3 #28 (21歳 男性) の場面3 に対する意味づけと自己表明

サークル活動をずっと続けていきたいと感じるようになった頃
場面に対する意味づけ
なれてきた頃でも服装は普段着のままかわらないと思う。それがジャージのままで帰ったりするので少しだれてきているのかもしれない。
自己表明
慣れてきた人たちに表情を作っても変に思われるだけだと思う。
何を話すかは、[中略] その人とはどんな話が合うかだいたい分かってきているのでそんなに困らない気がする。
振る舞いや態度は、仲が良くなった分、少し横柄な態度をとる場合があるがこれは、この人ならこれぐらい冗談で済むよなとかが分かっている。あくまで、相手が許容してくれる範囲までの態度である。

ここで彼は、「以前ほど愛想を振り撒かない」し、「少し横柄な態度をとる場合」もあるという。もちろん「あくまで、相手が許容してくれる範囲まで」ではあるにせよ、この段階では彼は、自らの我が儘なところや、自己中心的な側面、独善的ともいえる側面を、比較的自由に表明するようになる。

以上3名の回答に見られる共通点をここで整理する。

3名は場面1において共通して、上下の関係をそこでの中心に据えていることが示唆された。集団（#14ではゼミ、#22ではアルバイト先、#28では会社）への参加を認めるか認めないか、その決定権は上位者に握られているのである。決定に関しては彼らは極めて受動的であり、低い関与しか許されていない。

一方場面2については、仲間関係の形成を課題とする、並行的な関係が中心にあることが示唆された。集団（#14と#28はサークル、#22はゼミ）への参加の可否を決定するのは、ただ他者が一方的にそうするのではなく、他者と自己との相互作用による。その意味で、この場面では能動的、かつ高い関与の必要性が生まれてくる。

こうした能動性や関与の高さは、場面3において個別の関係を指向することでより高くなると考えられる。集団での一定の評価や立場を形成したからこそ、その上に立って、相手によって異なる密度での関係形成を指向することになる。

こうした意味づけの差異は、そこで表明される自己にどのような違いを生むのであろうか。あるいは生まないのであろうか。

場面1で表明される自己は、真面目さや熱心さ、責任感、積極性、若々しさなど、真摯で真剣、前向きな自己である。当該社会において望ましいと期待される自己を表明することで、自分に有利な決定を導こうとしている。いわば、訴求的な自己の表明である。

一方場面2で表明されるのは、協調的で、中立・中庸を旨とし、また話しやすく、自律的な自己である。他者に対する高度な配慮を見せつつ、自律した自己を見せようとしている。いわ

ば、親和的な自己の表明である。

また場面1や場面2は、肯定的な側面を中心に自己の表明を行う。否定的側面に関しては、場面1は積極的にこれを隠蔽しようとする。場合によっては、嘘さえつく。場面2では、否定的側面が表に出ないように回避に努める。それに対して、場面3ではむしろ、否定的な側面を開示する。積極的に行うというわけではないが、これを抑制しようとはしない。そうすることがより深い関係を構築する上で必要な自己の表明だと考えられているようだ。

次に、これまでの分析で明らかになった共通点が、他の協力者の回答にも見いだせるのか検討する。

まずはじめに、場面1において上下の関係を想定していると思われる箇所を抜き出した(Table 6-1)。協力者によってその表現は様々であるが、いずれも、場面1における他者との関係を意味づける際に、上下の関係を意識していることがうかがえるだろう。この場面における自己表明を、我々は訴求する自己と呼んだ。ここで対象としている協力者の回答にも、このような側面が多数表明されているようである(Table 6-2)。

次に場面2である。ここでは、並行的な関係が焦点となる。Table 7-1には、こうした点を意識していると考えられる箇所を抜き出した。この場面2における自己表明は、親和的な自己としてその特徴を表現した。Table 7-2では、このような自己表明が行われていると解釈しうる回答を抜きだした。

最後に、場面2への質問として設定した場面3についてである。場面2との違いを、関係性の濃淡として説明した場面である。こうした点への言及を、Table 8-1にまとめた。また、ここでの自己の表明は、肯定的な部分ばかりではなく否定的な部分を開示する点に特徴づけられていた。このような点に言及している箇所を抜き出したのがTable 8-2である。

このようにしてまとめてみると、本研究においてとりあげた12名の回答には、ある種の共通性が見いだせるのではないだろうか。それは、場面1における上下関係の重視、そうした場面での訴求する自己の表明、場面2における並行関係の重視とそこでの親和的な自己の表明、場面3のような対人関係の濃淡が生じる場面における否定的側面の開示、である。

個々の協力者の回答は、多様である。しかし、その多様性を集約した結果、場面に対する異なる意味づけによって異なった自己を表明するという、動的な自己の姿が垣間みられたのではないだろうか。

Table 6-1 場面1への意味づけ

(#17)

椅子には姿勢を正して座り、礼儀正しく振る舞う

相手の質問には、丁寧にはっきりと答える

自分の一番良いところをアピールしなければならない場所。相手に知ってほしい自分の長所は等身大以上にわかってもらい、相手に知られたくない自分の短所はできるだけ相手に見られないようにする場所。

(#32)

だらしくなく見えるものは着ません…ひかえめにしているようなこと [足を組むとかタバコを吸うとか] はできるだけしません。

目上の人との接し方、相手の質問にきちんとこたえられるかなどが試される

受かれば、自分はきちんとした印象が相手に与えられたのだという気になり、自信がつくし、落ちれば、きちんとできなかったのだ、どこが悪かったのだらうと反省します。

(#15)

先生の好みを考えないといけません。

ゼミの選考審査は、あくまでそのゼミの色に合うかどうかを見る面接だと思います。

こいつを入れればおもしろくなると思わせます。

明るく楽しい上に、礼儀も正しい

(#7)

面接に受かるということは、自分自身を認めてもらう、自分の人柄をほめてもらうというような気がします。

(#31)

まじめな人として、相手に理解されたいと思う。なぜなら、その方が採用してもらえる確率が高いから・・・

アルバイト採用時の面接とは、とにかく採用されることだけに焦点をあてる。そのためだったら、極端に言えば、うそをついて相手を欺いても、採用してもらいたいと思うだろう。

(#24)

学生らしい服装で派手すぎず、面接なのでカジュアルでもない

その学校を志望した理由

人生を左右すると思うのでとても緊張することは間違いないと思います。

(#20)

自分がどんな人物なのか知ってもらうチャンス

書類だけで、判断される

(#13)

礼儀正しい態度

企業の内定をもらうために、… [中略] …その企業が自分を採用すればいかに得するかをアピールしたい。

(#12)

先生に敬意を表し

しかし、それがただの誹謗中傷にならないように言葉を選びつつ、ハッキリという。

ゼミに入りたいことが、はっきりとまわってなくても、そのことを正直に述べ謝罪する。

先生との受け答えの中で、あまり、カッコをつけずに、正直に思ったことを話す。

残りの大学生活で、自分が好きなことを勉強、研究できるかという、大事な選択。そのために、そのゼミに入れるかどうかと言う、重要な面接。そして、ありのままの自分がそのゼミに受け入れられるかどうかという大事な面接。

自分の興味、学習意欲を生かせるか、また、それが自分が評価される、試されることでもある。

Table 6-2 場面1での自己表明

(#17)

真面目で優しそうな印象をもってもらいたいが、全く融通の利かない頑固な印象は持たれないようにしたいし、また反対に、従順な印象も持たれたくない。悪印象はもたれたくないが、「いい子」にも見られたくない。一般常識のある一人前の人間に見られたいが、それだけではなく、何かプラスアルファを持った人

(#32)

自分は愛想が良くいつも笑顔でいられて、接客業（その仕事）には向いていることをアピールします。

しっかりした子と思われたいので、あいさつや返事はきちんとします。明るくハキハキと。とにかくその場では嘘でもなんでもついて猫をかぶって、相手に自分を採用すると得だと思わせます。

(#15)

話しやすく楽しいイメージ

いつも笑顔を忘れないようにしています。ただし、質問をされたときには少し真面目な表情も作ります。

話す内容はあまり専門的なことに触れられないように、あたりさわりのない話をします。深く追求されて答えられないといけなないので。

(#7)

結構明るく、人との関係も上手くやっていくタイプです。まあ楽天的なんですけど。そういった所をみてもらいたいです。

私の元気良さ、結構活発な人であること

ニコっとした笑顔で話し、ゼミなどの真面目な話ではキリっとした真剣な表情で話します。

やはり重役の人には真面目さをアピールします。

(#31)

まじめな人として、相手に理解されたい

相手が質問してきたことには、明るく、はっきりと答え、とにかくここで働きたいということ

を明確にし、まじめな装いを見せる。

相手に不快感を与えないぐらいの笑顔やまじめそうな顔を使い分けながら面接した方が、相手に好印象を持ってもらえると思う。

(#24)

勉強を心底学びたいと思っていること

いかにもまじめ

(#20)

学習意欲のある好意の持てる人間

自分が将来何をしたいのか何になりたいのか、将来の夢

数学がどの程度得意であるとか、どのようにして現在の技術を身につけたかを詳しく、説得力のあることを話します。

(#13)

仕事に関して意欲的に取り組む人物

明るく、ハキハキと喋る

(#12)

周囲を明るくさせる人柄

ゼミにとって有益となるような雰囲気と、ゼミに真面目に取り組むことのできる落ち着きや責任感を備えている人物

きびきびとして、落ち着き払った態度

Table 7-1 場面2の意味づけ

-
- (#17)
サークルといった枠の中で、喋れない人を作るのはあほらしいので、誰とでも付き合えるようにしておく
その輪に入っていけるかどうか心配しながらも、入れるように手探りしながら行動している状態
- (#32)
自分をどれだけよい人間に見せることができるか。
最初のイメージが最悪だったらそこから挽回するのは相当の努力が必要だし、別によい人と思われなくてもいいと思っている人でも、周りの人間から好かれていた方がいろいろとやりやすいことはわかりきっていることだ
- (#15)
大学生活の良し悪しを決めるための一つの大きなイベントだと思います。少し大げさかもしれませんが、ゼミが楽しいイコール、大学の勉強も楽しいということにつながると思うのです。
- (#7)
これから2年間一緒に活動していく人たちと仲良くなれるのかどうか不安でした。
この先上手くやっていけるかどうかの大切な場面です。
- (#31)
最初にあいつおもしろい奴と思われた方が、友達も作りやすいし、仕事も楽しんでやることができる
相手の様子を見て、まず、相手を見下したような態度は取らずに、こちらから腰を低くして相手と接触するだろう。
- (#24)
新たに輪を広げる場だと思います。気が合う人がいたら、また連絡します。
- (#20)
ゼミの仲間がどんな人なのか知る最初の機会であり、ゼミ友達を作る、いい機会でもあります。
- (#13)
ゼミのメンバーでその人のことを良く知らない人と話をしてその人のことを知り自分のことを知ってもらったり、普段はあまり会話をしない人と話をして互いの親睦を深める
- (#12)
相手の人たちと、自分たちが一緒に盛り上がるような雰囲気を作ることを優先的にする。
少なくとも、あと二年はともに学生生活を過ごすことになる人たちとの出会いの場。
-

Table 7-2 場面2での自己表明

(#17)

ずっと楽しげで、表情は笑っている。誰も嫌いにならない、誰にも嫌われないように振る舞う

(#32)

自分は気さくでだれとでもよく話し明朗活発で、面白い子だということをアピールします。できるだけ笑顔で振る舞い、社交的になり、自分から積極的に話しやすそうな子にどんどん話しかけていきます。

いつもしているような話をいきなりすると、少し危険なので、込み入った自分の考えが全面に押し出されるような話は避けます。

笑顔で自分にも発言のチャンスが回ってくるようにしむけます。

(#15)

話しやすい印象

奇抜な服装や露出度の高い服装は避けるようにしたいです。

私はゼミの中では、ムードメーカーでありたいと思います。代表というわけではないけれど、私の一言で場がなごむような、そんな存在でありたい。

みんなが話しやすい子だと思って話をしてくれるのはとても嬉しいです。

(#7)

自分のことを気に入ってもらいたいので、猫をかぶるわけではないけど、何かと気を使います。できるだけ話をしようと努力します。それでいて相手の話もいろいろ聞いてあげます。なるべく雰囲気が悪く暗くならないように、楽しく過ごせるようにします。

相手との共通の話題を探してそれについて話します。

目立つことなく、しかも仲よくなって早く私のことを覚えてもらいたいのでいろんな人と話して自分をアピールしたいです。

(#31)

おもしろい人

楽しい人

みんなと同じような服装でいると思う。あまり、目立たないような服装でいると思う。

(#24)

元気良く明るい印象を持たれるようにします。服装は、あまり派手すぎず、地味でもなくて中間をめざします。表情はにこやか… [中略] …たわいもない話をし、たちいったことは、聞きません。振る舞いは、でしゃばったりせず、気がさくようにします。

(#20)

他人の印象に残らなくてもいいですが、あまり変な人だとは思われたくない

(#13)

気さくで明るい人物

明るく振る舞い、その場の雰囲気を盛り上げる

笑顔で楽しい表情

(#12)

面白く、明るい気さくな人間であると理解してほしい。

相手に積極的に話しかける。

相手との共通の話題を見つける。

相手が気軽に話しかけやすい雰囲気を作る

マイナスのイメージを与えないようにしなければいけない。

Table 8-1 場面3の意味づけ

-
- (#17)
人間関係が深まれば、一つの輪の中の人という付き合い方から友人としても付き合い方にかわってくる
- (#32)
個人的なこと、恥ずかしい話、もっと深い話ができるようになるでしょう。
- (#15)
例えば怒った表情をしていても、みんなは私に「何があったの?」と聞いてくれる。そのことによって、みんなが私を避けたりしないことはちゃんとわかっているからです。むしろ、私が落ち込んでいても怒っていても、みんなは私の話を聞いて助けてくれます。私は安心してみんなにそのままの自分を見せることができると思う。
- (#7)
自分をよく見せようとか、相手のことに気を使いすぎたりはしないと思います。自分のことも相手にもっと知ってもらいたいと思うだろうし、相手がどんなことを考えているのかも知りたいです。
- (#20)
場の雰囲気壊さない表情… [中略] …、羽目はずさない程度に振る舞い… [中略]、できるだけ周りに気を配ります。
- (#13)
お互いになれているので緊張する様子もなく和やかな表情をしている。… [中略] …最初のコンパと違い和気あいあいとしている。
- (#12)
自分のキャラクターは理解してもらっていると思う。
自分以外のゼミ生の個性が解っているので、… [中略] …、その人に合わせた話をする。
-

Table 8-2 場面3での自己表明

-
- (#17)
自分の好き嫌いや感情を織り込んで話す
表情に感情が表れていて
まわりに合わせているだけでなく、何かすることがあれば、それを優先して行動する。
- (#32)
お世辞を全くいわない。おかしいとおもったら意見することができる。表情もずっと笑顔だったのが、笑顔の回数が減ることは間違いないと思います。
- (#15)
私のワガママも、ゼミのみんな（先生も含めて）は許してくれます。
- (#7)
相手を傷付けるようなことは決して言わないけど、自分の思うこと、自分の意見はある程度主張すると思います。（反感を買わない程度に）
- (#20)
初対面のときには話さなかったような、少し内輪の（自分の）話もするようになる
- (#13)
その人とゼミや学校であったときにとるいつもの態度で、いつもと同じように振る舞っている。
- (#12)
遠慮せずに思ったことをズバズバと言う。
自分の身の上話などをしてみんなに相談のってもらったりする。
-

5. まとめ

本研究の目的は、場面に対する個人の意味づけによって異なる自己が表明されるということを示すことであった。実験の結果から、上下関係を重視すべき場と意味づけられたときには訴求的な側面、並行関係を重視すべき場と意味づけられたときには親和的な側面、そして対人関係の濃淡を重視する場と意味づけられたときには否定的な側面の開示、というように自己表明されていることが明らかとなった。つまり、自己表明にはそれぞれの場面を通して動的に構築される側面があると言えよう。

今回の実験で得られた言語データは非常に豊かなものであった。Potter & Wetherell(1987)は、ひとつの言語データの分析には非常に多くの着眼点が存在し得ると述べている。つまり、本研究のデータに対しても、今回行った以外の着眼点が存在する可能性は大いにある。今後、別の着眼点による分析を行うべきであろう。

また、今回の分析では、同じ個人が状況によって、様々な自己を表出することが認められた。ひとりの個人の中には、様々な特徴を持った自己が内包されていることがうかがえる。本研究では変化の側面は明らかとなったが、一貫性については論じられていない。今後、一貫性に注目した分析が必要であろう。そのような分析を通して、自己の構造全体の中で変化する側面と一貫した側面とがどのような関係にあるのかを検討していくことは今後の課題であろう。

Reference

- Billig, M. (1985) Prejudice, categorization and particularization: From a perceptual to a rhetorical approach. *European Journal of Social Psychology*, 15, 79-105.
- Billig, M. (1987) *Arguing and Thinking: A Rhetorical Approach to Social Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Billig, M. (1989) The argumentative nature of holding strong views: A case study. *European Journal of Social Psychology*, 19, 203-223.
- Billig, M. (1991) *Ideology and Opinions: Studies in Rhetorical Psychology*. London: Sage.
- Billig, M. (1997) Discursive, rhetorical, and ideological messages. In McGarty, C. & Haslam, S. A. (eds.), *The Message of Social Psychology: Perspectives on Mind in Society*. Cambridge, MA: Blackwell.
- Burr, V. (1995) *An Introduction to Social Constructionism*. London: Routledge. (田中一彦 (訳) 1997 社会的構築主義への招待 川島書店)
- Gergen, K. J. (1965) The effects of interaction goals and personalistic feedback on the presentation of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 413-424.
- Gergen, K. J. (1973) Social psychology as history. *Journal of Personality and Social Psychology*, 26, 309-320.
- Gergen, K. J. (1984) An introduction to historical social psychology. In Gergen, K. J. & Gergen, M. M. (eds.), *Historical Social Psychology*. Hillsdale, NJ: LEA.
- Gergen, K. J. (1994) *Toward Transformation in Social Knowledge (2nd ed.)*. London: Sage. (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀 (監訳) 1998 もう一つの社会心理学 — 社会行動学の変換に向けて ナカニシヤ出版)
- Gergen, K. J. (1997) Social psychology as social construction: The emerging vision. In McGarty, C. & Haslam, S. A. (eds.), *The Message of Social Psychology*. Cambridge, MA: Blackwell.
- Harré, R. (1987) The social construction of selves. In Yardley, K. & Hones, T. (eds.), *Self and Identity: Psychosocial Perspectives*. New York: John Wiley & Sons.
- Harré, R. (1989) Language games and texts of identity. In Shotter, J. & Gergen, K. J. (eds.), *Texts of Identity*. London: Sage.
- Harré, R. (1993) *Social Being (2nd ed.)*. Oxford: Blackwell.
- 木村竜也・西田晃一 (1996) 自己の状況依存性と言語による分析の可能性 情報研究, 4, 67-83.
- Potter, J. & Wetherell, M. (1987) *Discourse and Social Psychology: Beyond Attitudes and Behaviour*. London: Sage.
- Smith, J. (1981) Self and experience in Maori culture. In Heelas, P. & Lock, A. (eds.), *Indigenous Psychologies: The Anthropology of the Self*. London: Academic Press.

Appendix

各協力者の回答の上段には協力者による場面への意味づけ、下段には自己表明を示す。

〈 〉内は協力者がそれぞれの場面で選択した事例、[]内は分析者による補足を示す。

#	場面1	場面2	場面3
	<p>〈就職試験の重役面接〉</p> <p>就職試験の重役面接では、自分の人柄、性格を理解してもらいたいです。</p> <p>就職出来るかどうかの最終関門で、この面接の結果により、自分の将来をも左右する大きなイベントであると思っています。それと同時に、面接に受かるといことは、自分自身を認めてもらう、自分の人柄をほめてもらうというような気がします。</p>	<p>〈ゼミの最初のコンパ〉</p> <p>ゼミの最初のコンパでは、かなり緊張しました。これから2年間一緒に活動していく人たちと仲良くなれるのかどうか不安でした。</p> <p>「ゼミの最初のコンパ」はこれから2年間卒業するまで、一緒に勉強していく人たちとの顔合わせであるので、この先上手くやっていけるかどうかの大切な場面です。</p>	<p>ゼミに慣れてみんなともいろいろ話すようになってからのコンパでは、最初のコンパとは違って、自分を良く見せようとか、相手のことに気を使いすぎたりはしないとします。</p> <p>自分のことも相手にもっと知ってもらいたいと思うだろうし、相手がどんなことを考えているのかも知りたいです。</p>
7 女性	<p>私は自分で自分をいうと、結構明るく、人との関係も上手くやっていくタイプです。まあ楽観的なんですけど。そういったところを見てもらいたいです。</p> <p>スノーボードの話は、ちょっと重役の人に話すにはマイナスかもしれないけれど、私の元気よさ、結構活発な人であることを伝えたいです。</p> <p>表情は、笑顔です。ヘラヘラした笑顔ではなく、ニコっとした笑顔で話し、ゼミなどの真面目な話ではキリっとした真剣な表情で話します。</p> <p>服装は清潔感のある服装。シングルに紺のスーツで真っ白のシャツ。やはり重役の人には真面目さをアピールです。</p> <p>面接は短時間勝負です。その短時間のうちにどれだけ重役の人に好印象を与えられるかだと思います。だから本当の自分を完全に理解してもらうのは難しいと思うので、出来るだけ私の良いところを多くを理解してもらいたいです。</p>	<p>はじめてあった人たちには、自分を良く見せたいと思います。自分のことを気に入ってもらいたいのので、猫をかぶるわけではいいけど、何かと気を使います。できるだけ話をしようと努力します。それでいて相手の話もいろいろ聞いてあげます。なるべく雰囲気が悪く暗くならないように、楽しく過ごせるようにします。</p> <p>話すことはいろいろですが、相手との共通の話題を探してそれについて話します。</p> <p>とにかく目立つことなく、しかも仲良くなって早く私のことを覚えてもらいたいのいろいろな人と話をして自分をアピールしたいです。</p>	<p>相手を傷つけるようなことは決して言わないけど、自分の思うこと、自分の意見はある程度主張すると思います。(反感を買わない程度に)</p>

#	場面1	場面2	場面3
	<p><ゼミ選考での面接></p> <p>残りの大学生活で、自分が好きなことを勉強、研究できるかという、大事な選択。そのために、そのゼミに入れるかどうかという、重要な面接。そしてありのままの自分がそのゼミに受け入れられるかという大事な面接。また、自分の将来にも関わってくる大事な選考審査。</p> <p>つまり、自分の興味、学習意欲を活かせるか、また、それが自分がどう評価されるか、試されることでもある。そして、その結果如何で、自分の将来を左右する人生の大事な岐路であるという意味。</p>	<p><ゼミの最初のコンパ></p> <p>相手の人たちと、自分達が一緒に盛り上がるような雰囲気を作ることが優先的にする。</p> <p>自分の第一印象を決定する場であり、そして、他の人たちを知るといった重要な意味をもつ。少なくとも、あと二年はともに学生生活を過ごすことになる人たちとの出会いの場。それに、コンパで初めて話す人などもあるので、マイナスのイメージを与えないようにしなければいけない。</p>	<p>そのゼミに慣れてきたということとは、自分のキャラクターを理解してもらっていると思うので、遠慮せずに思ったことをズバズバと言う。また、自分以外のゼミ生の個性が解っていることで、最初のコンパでしたように、幅広い話題からはいるのではなく、その人に合わせた話をする。</p>
12 男性	<p>自分は周囲を明るくさせる人柄で、そのゼミに対して非常に興味を持っていて、ゼミにとって有益となるような雰囲気と、ゼミに真面目に取り組むことのできる落ち着きや、責任感を備えている人物。</p> <p>明るい表情で、清潔感がある服装で、先生に敬意を表しながらも、相手に飲まれて自分というものを無くさないように、きびきびとして、落ち着き払った態度で、自分の考えを明瞭に話す。</p> <p>先生の授業についてどう思うか、それが面白いのか、くだらないかを率直に述べる。[中略]しかし、それがただの誹謗中傷にならないように言葉を選びつつ、はっきりという。</p> <p>ゼミに入りたいことが、はっきりとまわってなくても、そのことを正直に述べ、謝罪する。むしろ、これからのやる気をアピールしていく。つまり、先生との受け答えの中で、あまり、カッコをつけずに、正直に思ったことを話す。</p>	<p>自分が面白く、明るい気さくな人間であると理解してほしい。そのために、相手に積極的に話しかける。とりあえず、幅広く、趣味の話、例えば映画やテレビのドラマなどの話から始めて、相手との共通の話題を見つけて、[中略] そうすることで相手が気軽に話しかけやすい雰囲気を作る。</p>	<p>そのゼミに慣れてきたということとは、自分のキャラクターを理解してもらっていると思うので、遠慮せずに思ったことをズバズバと言う。</p> <p>また、自分の身の上話などをしてみんなに相談ののってもらったりする。態度は別に威張っているわけでもなく、でも引込んでいないわけでもないように、みんなを盛り上げようとする。</p>

#	場面1	場面2	場面3
13 男性	<p><就職試験の重役面接></p> <p>企業の内定をもらうために、[中略]何ができるかなどその企業が自分を採用すればいかに得するかをアピールしたい。</p> <p>就職してから転職、倒産したりリストラされなければ約40年間その会社とかかわるのだから、自分の人生に大きく影響を与え、左右することになり、大きな意味を持っている。</p>	<p><ゼミの最初のコンパ></p> <p>ゼミのメンバーでその人のことを良く知らない人と話をしてその人のことを知り自分のことを知ってもらったり、普段はあまり会話をしない人と話をして互いの親睦を深める意味を持っている。</p>	<p>お互いになれているので緊張する様子もなく和やかな表情をしている。お互いになれているので最初のコンパと違い和気あいあいとしている。</p>
	<p>まじめで、その企業の業務内容に関心を持っていて、仕事に関して意欲的に取り組む人物として理解してもらいたい。</p> <p>緊張して、顔は少しこわばっている。スーツ姿で、礼儀正しい態度で、明るく、ハキハキと喋る。</p>	<p>自分のことを気さくで明るい人物として相手に理解してもらいたい。</p> <p>お酒を飲んで、明るく振る舞い、その場の雰囲気を盛り上げるため、冗談をいったりする。普段着ているラフな服装で、笑顔で楽しい表情をする。</p>	<p>話すことは、普段お互いに話していることとあまり変わらないと思う。</p> <p>服装は学校に来るときに着ている服で、その人とゼミや学校であったときにとるいつもの態度で、いつもと同じように振る舞っている。</p>
14 女性	<p><ゼミ選考審査での面接></p> <p>面接という、かしまったシチュエーションで自分をいかにうまく出すかというのが最大のポイントだから、終始笑顔だけは絶やさないように心掛けます。</p> <p>[面接では]先生と自分を同列ではなく、上下の関係だということを確認に頭において接するということが大事だということです。</p> <p>一般的に面接というと、初対面の人に対して、自分をいかに良く見せるかということがポイントとなると思うので、[中略]それはゼミ選考審査での面接にも通じるところがあると思うので、[ゼミ選考審査での面接は]畏まらなければならない場面、と思っています。</p>	<p><参加し始めたころのサークルで…></p> <p>大学に入ったばかりの頃、大学生活=サークル活動と思っていたので、初めてサークルに顔を出したとき、ここでしくじったらこれからの4年間がばあになると気合いを入れていた覚えがあります。</p> <p>自分のなかに理想の自分がいて、それに近づけるように大学デビューをしようとしていました。</p> <p>[サークル活動とは]大学生活を左右するであろう人脈を広げる場である。</p>	<p>より深く人間的なおつきあいが出来る人を見つける [場]。</p>

#	場面1	場面2	場面3
14 女性	<p>研究内容について入念な事前勉強をしていき、その自分が勉強した内容、そしてこれから研究したい内容を語ります。そのときはなるべく笑顔で、フレンドリーに、しかし尊敬の念は忘れない、ちゃんと先生を敬う態度をとります。</p> <p>面接の時にすごく堅い格好をしていても、あとで苦しくなると思うので、いつも通りでいいと思います。</p> <p>[面接では] とりあえず、先生に自分の熱意を伝えるのが一番なので、自分の自然な姿勢は崩さず、しかしかなり(自分なりに)低姿勢で笑顔を保って研究内容について相談する、という形でいいんじゃないかとおもいました。</p> <p>特に、成績でゼミ生を選ぶ先生と面談するときは、成績は悪いけれどやる気だけはとてもあることをしつこく何度も強調し、事前の勉強をとにかく力を入れて行い、それについてほかの人よりもこんなに勉強する気があるのよー!!ということをアピールします。先生に、とても熱心な研究心がある生徒だと感じてもらうためです。</p> <p>そこ[成績の話題]に触れられるととても弱いので、自分の勝負できるところで喋りまくって相手に印象づけるのが大事だと思います。あと、とりあえずがさつなところがばれないように、多少お行儀よく振る舞います。</p> <p>終始笑顔だけは絶やさないように心掛けます。</p> <p>決して甘えた態度はとらず、しかし先生を尊敬しているということも絶対にわすれません。</p> <p>ゼミの先生には、あとでほろが出るので、自分をよく見せようとかいうことよりも、自分をなるべく知ってもらおうということが第一だと思います。</p>	<p>とても気を配って誰とでも会話をするように心掛けました。</p> <p>自分にマイナスイメージがつくような言動すべてを回避していました。</p> <p>とりあえず話しやすいいい子と思われるように努力したと思います。</p> <p>自分が話すときは話しまくり、聞くときは熱心に聞くよう心掛けました。大学生活を先に送ってきた先輩にそのことを聞いた気持ちはたくさんあったし、しかし自分のことを満身に語れないような人間には思われたいなかつたので自分のことも適度に話しました。</p> <p>とりあえず嫌われないための最低ラインを守りつつ自分を見せていくしかないと思っていました。今も昔もそうですが、私は八方美人で愛想が良すぎるころがあるので、[逆に]それを武器にしようと考えていたと思います。</p> <p>人の話を聞くことができ、かつ自分のことを話すこともできる。ものの考え方がフレキシブルであり筋も通っている。とりあえず一本スジが通った人間になりたかったので、そのように振る舞おうとしていたと思います。</p>	<p>話の内容はもっとくだけていったと思います。[中略] 仲良くなるうと思ったら人間的なつながりというか、もっと人間らしいところを見せていく方がいいと思うからです。そして話の内容が変わって時間がたち、仲良くなれたかなと思いだしたら、もっと自分を知ってもらい、より深く人間のおつきあいが出来る人を見つけるために、最低限のマナーを守りつつ自分の好きなように振る舞い、とりたいたい態度をとり、好きな服装をします。</p> <p>[私は] 根がどうやらわがままらしいので、そのように振る舞ってしまいます。</p>

#	場面1	場面2	場面3
15 女性	<p><ゼミ選考審査での面接></p> <p>[ゼミ選考審査の面接では] その先生の好みを考えないといけません、とりあえず笑顔を作ります。</p> <p>ゼミの選考審査は、あくまでそのゼミの色に合うかどうかを見る面接だと思います。私が入りたいと思うゼミが、もしも私に向いていなかったとしても、私なら自分の持っているキャラクターを精一杯使って、こいつを入れればおもしろくなると思わせます。</p>	<p><ゼミの最初のコンパ></p> <p>「ゼミの最初のコンパ」は私にとって、大学生生活の良し悪しを決めるための一つの大きなイベントだと思います。少し大げさかも知れませんが、ゼミが楽しいイコール、大学の勉強も楽しいということにつながると思うのです。</p>	<p>私は最初のコンパでは少し演じる、と書きましたが、半年以上たって徐々にみんなと仲よくなった今は、もうそんな必要はありません。私は安心してみんなにそのままの自分を見せることが出来ると思う。</p>
	<p>私はゼミでもどこでも、明るく話しやすい人だと思ってもらいたいので、いつも笑顔を保つようにしています。ただし、質問をされたときには少し真面目な表情も作ります。自分がどれだけそのゼミに入りたいかを、大げさにはなくさりげなくアピールしてみるのです。話す内容はあまり専門的なことに触れないように、あたりさわりのない話をします。深く追求されて答えられないといけないので。</p>	<p>私はみんなに、話しやすい印象をもってほしいと思います。</p> <p>まず服装はだらしない程度にラフなものにします。もちろんこれは自分にちゃんと似合っているものを前提としますが、奇抜な服装や露出度の高い服装は避けるようにしたいです。</p> <p>態度は、ウンにならない程度で少し演じます。</p>	<p>自分の全てを隠さずに、ありのままの自分でゼミの仲間に接します。服装は、自分のその日の気分で適当なものを選び、表情もそのときの気分をそのまま表現します。例えば怒った表情をしても、みんなは私に「何があったの?」と聞いてくれる。そのことによって、みんなが私を避けたりしないことはちゃんとわかっているからです。むしろ、私が落ち込んでいても怒っていても、みんなは私の話を聞いてくれて助かります。</p>
	<p>私が入りたいと思うゼミが、もしも私に向いていなかったとしても、私なら自分のもっているキャラクターを精一杯使って、こいつを入れればおもしろくなると思わせます。</p> <p>面接が終わった後にもやっぱり笑顔で挨拶は欠かせません。明るく楽しい上に、礼儀も正しい。そんなふうにしてもらえたら、きっと先生は私を採用したくなるはずです。</p>	<p>私はゼミの中では、ムードメーカーでありたいと思います。代表というわけではないけれど、私の一言で場がなごむような、そんな存在でありたい。人と話すのが好きな私なので、みんなが話しやすい子だと思って話をしてくれるのはとても嬉しいです。</p>	<p>最初のコンパでは少し演じる、と書きましたが、半年以上たって徐々にみんなと仲よくなった今は、もうそんな必要はありません。私は安心してみんなにそのままの自分を見せることができると思う。</p> <p>私のワガママも、ゼミのみんな(先生も含めて)は許してくれます。</p>

#	場面1	場面2	場面3
	<p><就職試験の重役面接></p> <p>自分の一番良いところをアピールしなければならぬ場所。相手に知ってほしい自分の長所は等身大以上にわかってもらい、相手に知られたくない自分の短所はできるだけ相手に見られないようにする場所。</p>	<p><参加し始めたころのサークルで…></p> <p>サークルといった枠の中で、喋れない人を作るのはあほらしいので、誰とでも付き合えるようにしておく。</p> <p>「参加し始めたころのサークル」とはその輪に入っていけるかどうか心配しながらも、入れるように手探りしながら行動している状態。そのなかの雰囲気も、暗黙の了解のようなルールも、わからないので遠慮がちに行動しているとき。</p>	<p>人間関係が深まれば、一つの輪の中の人という付き合い方から友人としても付き合い方に変わってくると思う。</p>
17 女性	<p>椅子には姿勢を正して座り、礼儀正しく振る舞うが、リラックスして座るように心掛ける。相手の質問には、丁寧にはっきりと答える。</p> <p>私は真面目で優しい印象を持ってもらいたいが、全く融通の利かない頑固な印象は持たれないようにしたいし、また反対に、従順な印象も持たれたくない。悪印象は持たれたくないが、「いい子」にも見られたくない。一般常識のある一人前の人間に見られたいが、それだけではなく、なにかプラスアルファを持った人と思っていきたい。</p>	<p>振る舞いはずっと楽しげに、表情は笑っている。誰も嫌いにならないよう、誰にも嫌われないように振る舞う。</p>	<p>何を話すかは初めのころとあまり変わらないと思う。けれど、内容はもっと具体的に、自分の好き嫌いや感情を織り込んで話すと思う。</p> <p>表情は初めの頃より、表情に感情が表れていて、ポーカーフフェイスはやめている。振る舞いは、まわりに合わせているだけでなく、何かすることがあれば、それを優先して行動する。</p>
	<p><入試の面接></p> <p>メインは、やはり、自分がどんな人物なのか知ってもらうチャンスだと思います。書類だけで判断されるのはやはり、人間味がなくて嫌なので。</p>	<p><ゼミの最初のコンパ></p> <p>ゼミの仲間がどんな人なのか知ることの最初の機会であり、ゼミ友だちを作る、いい機会でもあります。</p>	<p>表情：場の雰囲気を壊さない表情。普通の表情でしょうか。</p> <p>振る舞い／態度：あまり、羽目をはずさない程度に振る舞います。できるだけ、周りに気を配ります。</p>
20 男性	<p>どのように理解してもらいたいか：その分野である程度の技術をもっており、学習意欲のある好意の持てる人間であること。</p> <p>話す内容：自分が将来何をしたいのか何になりたいのか（SE、プログラマ）、将来の夢（Windows標準の市場を覆すようなOSを開発したい）、現在、どんなことが出来て、その学部と、どのような関係があるのか。</p> <p>入試の面接なので、学部に沿ったことをアピールします。例えば、[中略]数学がどの程度得意であるとか、どのようにして現在の技術を身につけたかを詳しく、説得力のあることを話します。</p>	<p>どのような人物として相手に理解してもらいたいか：ありのままの、自分として見てもらえたいと思います。</p> <p>特に、他人の印象に残らなくてもいいですが、あまり変な人だとは思われたくないですね。</p>	<p>初対面のときには話さなかったような、少し内輪の（自分の）話もするようになると思います。</p>

#	場面1	場面2	場面3
	<p><アルバイト採用時の面接></p> <p>たかがアルバイトと言っても、それで落とされると自分が否定されたようで結構ショックを受けるので、私はそれほど気楽なものとは思っていない。[中略] 多少なりとも自分の能力や性格を問われる大切な場であるし、どちらかと言えばフォーマルなもの。</p>	<p><ゼミの最初のコンパ></p> <p>他のゼミのメンバーや先生と交流することで、ゼミ内で新しい友だちを作るのに有効な場面。</p> <p>ゼミの中に知り合いがないのであれば、それをきっかけに仲良くなれるチャンスになるだろうし、[中略] お互いのことをよく知るいい機会になる。</p>	<p>ある程度仲がいい人たちとだったら、気兼ねがいらぬ [場]。</p>
22 女性	<p>そのアルバイトに対してやる気を持っている。明るくて普通の女の子だが、自分の考えをきちんと持って、まわりにあまり流されないしっかりした人。責任感があるので仕事を任せられると思わせる。</p> <p>初対面の人と接する時は、第一印象が大切なので、面接場所に着いた時点から人当たりの良さそうな態度で接する。面接をしている人の話を聞くときは、下を向いたりしないでその人の方を見て相槌をうって、ちゃんと話を聞いていて仕事に対してのやる気を見せる。必要があれば、今までのバイトの経験なども相手に話し、もし聞かれればそのバイトを志望した動機なども答えられるようにはしておく。</p> <p>面接をしている人に何か話しを振られたら、面接に不利にならない限り、正直に思ったことを言う。自分に都合の悪いことでも、バイトでそこまで深くかわりあうことは滅多にないので、まあ何を話しても構わないと思う。私は全く知らない人と話すとき、その人に悪い印象をもってもらいたくないので、けっこうにこにこしたり、いい人そんな態度を取ろうとするので、バイトの面接の時でも同様だろう。</p>	<p>頭のいい人と思われなくていいが、バカとは思われたくない。うるさい人でもなく、それなりに物事を考えている人と思われたい。私は初対面の人や、大勢での飲み会はあまり得意ではないが、これから少なくとも週1回ゼミの時間に顔をつきあわせていく人たちの飲み会なので、とりあえず嫌な人とか、つまらない人と思われたくないの、その場が和めるように話題に参加する。初めての飲み会なので、ゼミ内にはまだ仲良くない人も大勢いるはずなので、いろいろな人と言葉を交わす努力をする。それと先入観でこの人は苦手なタイプかも、と感じて喋る気になれないことも多々あるが、ゼミで極力それはしない。</p> <p>初めて話す人とは話が詰まりやすいので、1対1ではあまり喋りたくない。周辺の人4、5人ぐらいで喋る。</p> <p>あまり貝にならず、とりあえず何か喋ってみる。</p> <p>私は表情がないとよく言われるので、コンパの場で無表情でいないように気をつける。</p>	<p>私は友だちの中でも、どちらかという人話を聞くことの方が多い。が、飲みにいったりするとしゃべる側になるので、ゼミのコンパでも他の人と仲良くなっていたら、どうでもいいことを話題に沢山しゃべっているだろう。</p> <p>感じがいいように振る舞おうとか、相手によく思われようということはあまりないのでいつもと変わらない態度で接する。</p>

#	場面1	場面2	場面3
24 女性	<p><入試の面接></p> <p>ある意味大きく言えば、人生を左右すると思うのでとても緊張することは間違いないと思います。</p> <p>.....</p> <p>一番理解してもらいたいことは、勉強を心底学びたいと思っていますことです。服装は学生らしい服装で派手すぎず、面接なのでカジュアルでもないことです。そして、話す内容はその学部での知識をある程度知っていること、学生生活をどのように過ごしたいか、またその学校を志望した理由などです。</p> <p>態度は、いかにもまじめであることを、醸し出します。</p>	<p><合コン></p> <p>別に彼氏を作る目的ではなく、新たに輪を広げる場だと思います。気が合う人がいたら、また連絡します。</p> <p>.....</p> <p>態度は元気良く明るい印象をもたれるようにします。服装は、あまり派手すぎず、地味でもなくて中間をめざします。表情はこやかにし、話す内容は[中略]たわいもない話をし、たわいもない話は、聞きません。振る舞いは、でしゃばったりせず、気がきくようにします。</p>	
	<p><就職試験の重役面接></p> <p>重役面接に至るまで、いくつかのテストをクリアしてきて、あと一歩で目標が達成されるという大事な場面だと思うので、人生(社会人編)の中でのスタート場所の決定という感じがする。</p>	<p><参加し始めたころのサークルで...></p> <p>友だちを増やしたくてサークルに入った。</p> <p>学生生活の充実を得るために[サークルに]に入った。</p> <p>生活をより楽しくするためのスタート地点という意味を持っていると思う。</p> <p>サークルに入っているのと、サークルに入っていないのでは環境がかなりかわってくると思うのでけっこう大事な場面だと思う。</p>	<p>なれてきた頃でも服装は普段着のままかわらないと思う。それがジャージのままで帰ったりするので少しだれてきているのかもしれない。</p>
28 男性	<p>人柄がよく、誠実そうな人だと思ってもらい、こいつは会社に入ってもらいたいと思わせるように理解してもらいたい。</p> <p>重役面接の時、自分は卑屈にならないように堂々とした態度をとり、相手が不愉快にならない位にちょっと大きめの態度で振る舞い、[中略]なるべくなら自分の答えずらうような質問をされないように、こちらから多くのことをしゃべっていききたい。表情は相手に覇気がないと思われたくないので、どちらかというと明るめで、相手の目を見るようにし、そしてクリーニングしたと言わんばかりのピチットしたスーツを着て面接に挑むであろう。</p> <p>面接には採用されたいから行くのだから、ちょっとでも他の人より勝っているように思われたい。</p> <p>適当に答えているとするどいツッコミを入れられそうだから、そうなるぐらいなら素直に答えたい。</p> <p>質問をされて答えられないと相手に悪い印象しか与えないような気がするので、それならこっちから聞いていった方がいい。</p>	<p>自分を明るく気さくな感じで、友だちになりやすそうな人と思ってもらいたい。</p> <p>暗い人と思われないようにしときたい。例えば、ずっと下を見ないようにしたりいろいろな人と目を合わせるようにして喋るきっかけを作ったりする。</p> <p>振る舞いは、普段通りでいいと思うが、あくまで控え目な感じがいいと思う。先輩もたくさんいると思うので、できるだけ失礼のないようにしておきたい。態度は、なるべくでかい態度は控えた方がいいと思う。</p>	<p>慣れてきた人たちに表情を作っても変に思われるだけだと思う。</p> <p>何を話すかは、[中略]その人とはどんな話が合うかだいたい分かってくるのでそんなに困らない気がする。</p> <p>振る舞いや態度は、仲が良かった分、横柄な態度をとる場合があるがこれは、この人ならこれぐらい冗談で済むよなとかが分かってくるため。あくまで、相手が許容してくれる範囲までの態度である。</p>

#	場面1	場面2	場面3
31 男性	<p><アルバイト採用時の面接> アルバイト採用時の面接とは、とにかく採用されることだけに焦点をあてる。そのためだったら、極端に言えば、うそをついて相手を欺いても、採用してもらいたいと思うだろう。</p>	<p><アルバイト先で同僚に紹介されたとき> 第一印象は面白い人やなーと相手に思ってもらいたいと思う。</p> <p>最初にあいつおもしろい奴と思われた方が、友だちも作りやすいし、仕事も楽しんでやることのできるから、やはり相手には楽しい人に思われたいし、理解されたい。</p> <p>相手の様子を見て、まず、相手を見下したような態度は取らずに、こちらから腰を低くして相手と接触するだろう。</p> <p>同僚に紹介されるというのはそれなりの信頼関係があるのだと思う。</p>	
	<p>まじめな人として、相手に理解されたいと思う。なぜなら、その方が、採用してもらえらる確率が高いから…</p> <p>相手が質問してきたことには、明るく、はっきりと答え、とにかくここで働きたいということを確認にし、まじめな装いを見せる。</p> <p>表情は、満面の笑みというのも何かちょっと変なので、相手の顔をはっきりと見て、相手に不快感を与えないぐらいの笑顔やまじめそうな顔を使い分けながら面接した方が、相手に好印象を持ってもらえると思う。</p>	<p>第一印象はおもしろい人やなーと相手に思ってもらいたいと思う。</p> <p>服装はとにかくカジュアルにみんなと同じような服装でいると思う。あまり、目立たないような服装でいると思う。あまり、目立った服装で唇と、何か自分だけ浮いているような感じがするからである。</p>	<p>僕は歌の話をすることが多い。そうすることで、きっかけをつくり、カラオケを歌うように方向を持っていく。また、歌の話をするとたいがいの人が分かっているので会話の中心人物になれることが多い。</p> <p>だれにでも明るい態度をとることが多い。</p>
32 女性	<p><アルバイト採用時の面接> 目上の人との接し方、相手の質問にきちんとこたえられるかなどが試されると思います。</p> <p>その面接に受かるか落ちるかも私にとっては大きな意味を持っています。それに受ければ、自分はきちんとした印象が相手に与えられたのだという気になり、自信がつくし、落ちれば、きちんと出来なかったのだ、どこが悪かったのだろうと反省します。つまり、アルバイトの面接というのは、普段の自分をどれだけ偽り、ごまかす事が出来るか？というものです。</p>	<p><ゼミの最初のコンパ> ゼミ最初のコンパは私にとっては、自分をどれだけよい人間に見せることができるかの勝負です。</p> <p>最初のイメージが最悪だったらそこから挽回するのは相当の努力が必要だし、別によい人と思われなくてもいいと思っている人でも、回りの人間から好かれていた方がいろいろとやりとりしやすいことはわかりきっていることだし。</p>	<p>個人的なこと恥ずかしい話もつと深い話ができるようになるでしょう。なぜなら、やはりいつまでも猫をかぶっているのはしんどいし、本当の自分を知って、理解してほしいからです。</p>
	<p>とにかく見た目がこわいと言われますので、ずーと笑顔のままです。自分は愛想が良くいつも笑顔でいられて、接客業（その仕事）には向いていることをアピールします。あとしっかりした子と思われたいので、あいさつや返事はきちんとします。明るくハキハキと。服装はあんまり派手でなく、だらしない見えるものは着ません。態度も大きいと言われるので、ひかえめにしていつもしているようなことはできるだけしません。例えば、足を組むとかタバコを吸うとか。</p> <p>とにかくその場では嘘でもなんでもついて猫をかぶって、相手に自分を採用すると得だと思わせます。</p>	<p>ゼミの最初のコンパでは、自分は気さくでだれとでもよく話し明朗活発で、面白い子だということをアピールします。出来るだけ笑顔で振る舞い、社交的になり、自分から積極的に話しやすそうな子にどんどん話しかけていきます。</p> <p>いつもしているような話をいきなりすると、少し危険なので、こみいった自分の考えが前面に押し出されるような話は避けます。みんながみんな意見が合致するような話題をえらびます。自分以外の人間が話をしているときでも、気を抜くことなく、笑顔で自分にも発言のチャンスが回ってくるようにしむけます。[中略]そして少しずつ本当の自分を出していきます。</p>	<p>本来の自分を取り戻すことが出来ると思います。態度も大げさで無理していたのがいつもの素の自分に戻れるし。例えば、面白くないことで笑わない。や、お世辞を全くいわない。おかしいとおもったら意見を言うことができる。などです。</p> <p>やはりいつまでも猫をかぶっているのはしんどいし、本当の自分を知って、理解してほしいからです。</p>